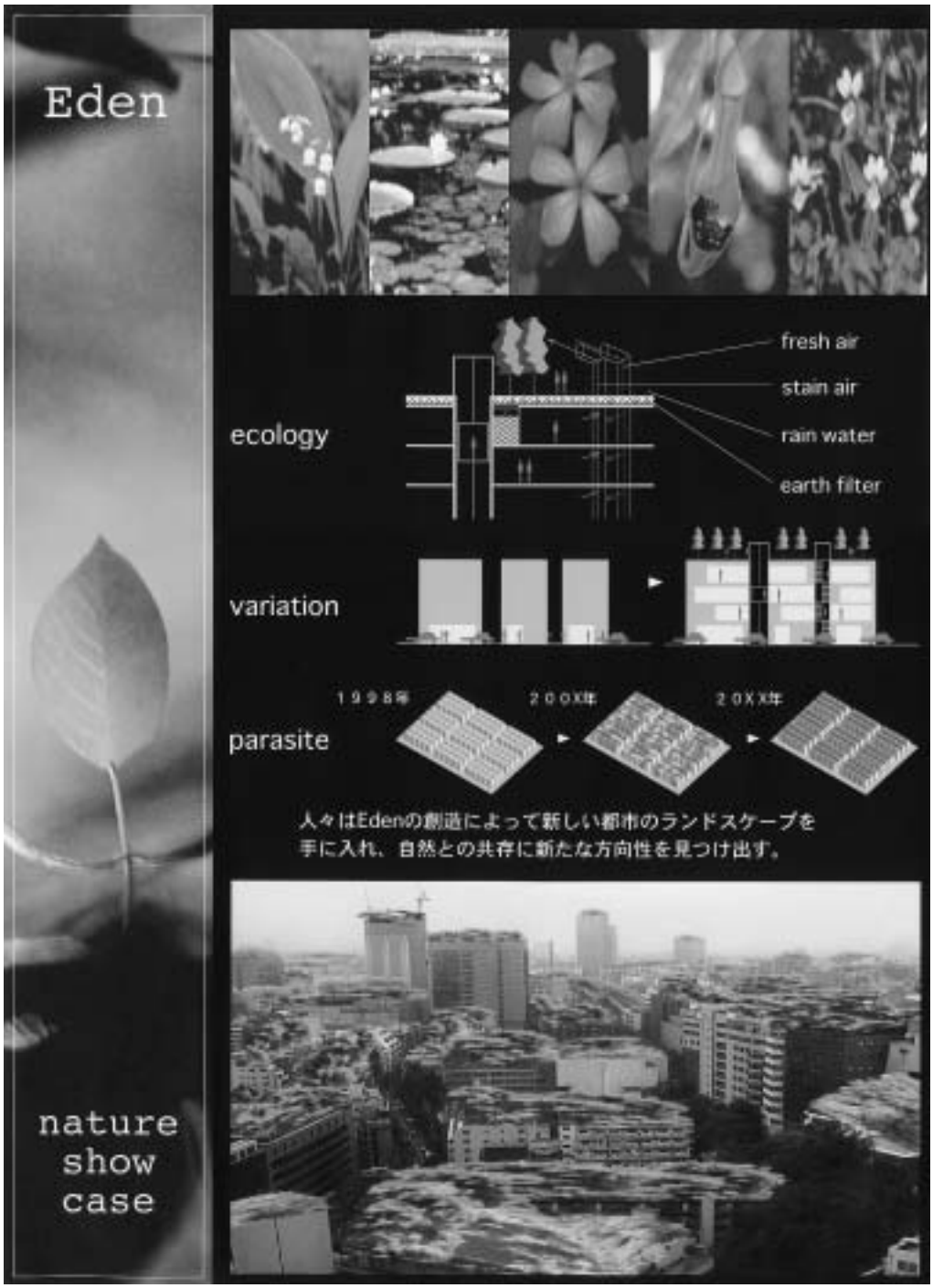

田中　応明

設計演習Ⅰ

第１課題
建築とランドスケープの
インタラクション
―屋上庭園―

第２課題
建築と都市の
インタラクション
―駅―

３年２組

担当：
高宮　真介

【第１課題】
田中　応明

木を切り倒し、土地を平坦化し、まるで自然環境に抵抗するかのように成長してきた都市、東京はどんよりとした空気の中、人々の営みを包み込んでいる。そんな東京に自然環境と再び共生ができるような第２の地上ともいうべき屋上庭園（Eden）を提案する。
Edenは人間の植物依存に対してのNature Show Caseとして活用され、過去の過ちを繰り返さぬように人々に訴えかけながら、都市に蔓延していくであろう……。

指導＝高宮　真介

ル・コルビュジエによって「新建築の５原則」のひとつとして高らかに謳いあげた屋上庭園だったが、近代建築史の中では意外に注目されずに終わってしまっている。東京のように、地上に余白の空間がとれない都心部においては、屋上庭園はいろいろな意味でその重要性が認められるべきだと思う。
田中君の案は、池袋の東口駅前のビル群の屋上をエコロジカルな植物園としてパブリックに開放しようというものである。地上30m位のビルの屋上で、いろんな樹木や草花を楽しむというのも、都心であるが故に面白い発想だと思った。スペインのアンダルシア地方ではパティオのコンクールがあり、みんなが競い合って自慢の小空間を披露する。そんなことでも起こり得るような場の設定が、この作品の魅力である。

菅原　大輔

の空間を構成するためにプラットホームに滑り込む。二つの空間内では、同時多発的に都市機能が展開される。
「表と裏」「光と闇」「理性と欲望」「喜びと悲しみ」、全く別のようで、常に隣り合わせであること。
深夜の駅に広がるのは
　多焦点都市……東京である。

【第２課題】
菅原　大輔
普段、交通機関として人々の通過点に過ぎない駅。終電車が去って静寂を取り戻したかのように見えた駅が一つの都市空間として、今度は人々を吸い込んでいく。
様々な機能を持った列車は、〈賑わい〉と〈静けさ〉それぞれ

指導＝高宮　真介
いま大都市における駅には、〈都市と建築〉、〈土木と建築〉という境界を越えたインタラクションが発生しつつあり、都市施設としていろんな可能性を示唆してくれる。喧噪と混雑で語られるこの都市施設が、最終電車が通り過ぎると、静寂と無機能に変貌する。そんな二面性をうまく捉えてプロジェクトにしたのが菅原君の作品である。つまり、終電が通り過ぎてから翌朝までの間、いろんなふうに装置化された電車がプラットホームに滑り込み、そのプラットホームのスペースと一体となって、即席の都市が誕生する。アートギャラリーや図書館からクラブやレストランまで、多様で都市的なアクティビティを生み出す魅力がこの作品にはある。お祭りの神社の屋台のようであり、またアーキグラムのインスタントシティーのようにも読みとれる。JRになって久しいので、もうそれぐらいのことは当然検討されているのかも知れないが……。